

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 101

2026.8,11発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第101回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『願いを実現させる書一書とは何かー』

2026年7月11日（土）101回フォーラムを開催いたしました。参加者は、25名でした。

日 時：令和年7月11日（土）PM13時00分～16時

場 所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）

講 師：梶田 文宗 氏（以文会常任理事、春日井市民展審査員、中日文化センター講師）



会場風景、発表する梶田 文宗 氏

《講演要旨》

願いを実現させる書

文字の起源

現在発見されている世界最古の文字は、紀元前 3,000 年頃に古代メソポタミアで生まれた楔形文字です。この文字は、モノとモノを交換する商業的な交易のために、また、都市国家の大きな行政組織の運営のために、その運営を記録する目的で発明されたと考えられています。一方、少し遅れて古代エジプトでは、インクで書く文字として、実用的な神官文字（ヒエラティック）と、石などに

刻む文字である聖刻文字(ヒエログリフ)が誕生しました。

古代エジプト人は、聖刻文字(ヒエログリフ)を「神の言葉」と呼び、神の言葉が永遠に存続することを願って、石や建造物の壁面などに、神々に対する賛美、王の偉業や歴史記録、復活のための呪文などを彫刻家が刻みました。この文字は権力を示す象徴的な存在として、3,000年以上にわたって、その字形を大きくかえることなく継承されました。

現在発見されている最古の漢字は、紀元前 1,400 年頃からの出土遺物に刻まれた「甲骨文字」です。この文字は、亀甲や牛骨などに刻まれた占いの記録のための文字であり、この時代の殷王朝は占いによって政治を行い、そのために、その内容や結果を記録する必要があったと考えられています。また、この時代以降、祭祀のための青銅器が盛んに作られ、そこに文字が記されていますが、この文字を「金文」といいます。金文は、祭祀のための先祖の名前や祭器の製作者の名前などを記していましたが、その後、西周の時代では、王朝貴族の勲功を記念して記すことが多くなり、文字数が増えていきました。

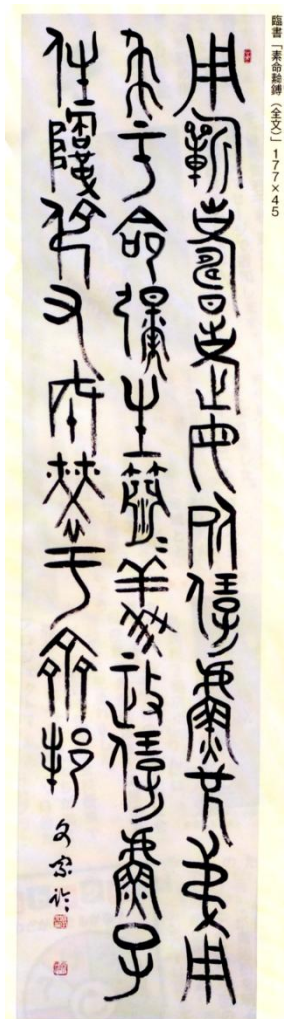
文字の変遷



メソポタミアの楔形文字は、西アジア全域で用いられるようになりましたが、紀元前 2,000 年から 1,000 年頃にアルファベットが発明されると、それは文字数が少なく、一音一文字の表音文字で、簡単で合理的であることから、次第にアルファベットに代わって行き消滅しました。ローマ帝国により、エジプトが支配され、後 392 年にキリスト教がローマ帝国の国教に定められると、エジプトの神殿は破壊され、聖刻文字(ヒエログリフ)の伝も途絶えてしまい、エジプトの文字は消滅しました。

一方漢字の方は、青銅器と一緒に、文字(金文)も中国各地に広まって行くと、各地で独自の金文が使われるようになりました。春秋戦国時代を経て、秦の始皇帝が中国を統一すると、文字は篆書体(小篆)に統一されました。秦が滅び漢の時代になると、篆書体より速く書くことが出来る隸書体が公の書体となり、その後、より速く書ける草書体が生まれ、さらにより分かり易い楷書体と行書体が誕生しました。

このように、漢民族の間で神聖な文字として生まれた漢字は、字体の変遷はあったものの、それぞれの書体は現在も使われており、一字一字



が一定の意味を持つ表意文字の特性を保ったまま、継続的に使用されている唯一の文字体系といえます。

- ① 「甲骨文・金文の臨書作品」この作品は甲骨文と金文の臨書作品で、造形的な面白さに加え、素朴感漂う作品に仕上げました。

漢字の伝来

漢字は、表意文字の特性をもっていることから、中国のような他民族で言語の違う地域へ行っても、文字を書くことである程度意味が通じます。その為、東アジア一帯にこの漢字は広まって行きました。

日本では、後 57 年に中国漢王朝から賜った「漢委奴国王」の金印が考古学資料として最古の漢字であると考えられていますが、それ以前の日本には文字はなかったのでしょうか。弥生時代後期の遺跡出土土器には、文字とは言えないまでも、文様のような記号が散見されています。これは「記号文」と呼ばれていますが、離れた遺跡間でも同様の記号文がみられることから、記号文を使った情報の共有があった可能性が高いと思われます。

また、漢字伝来以前には、数種類の「神代文字」があったという説もあります。これは、江戸時代の国学者である平田篤胤が提唱して以来論争となっていました。現在の学界では否定されています。

いずれにしても、古代の文字は神聖なものとされていましたが、日本では漢字伝来以降、この漢字を日本語の音に当てはめる表記法「仮借」により、文字として広まって行き、さらに一つの音に複数の漢字を当てはめる「万葉仮名」が成立します。そしてこの「万葉仮名」の簡略化が進んでいくことで、表音文字である「カタカナ」「ひらがな」が誕生しました。

神代文字について

「神代文字」とは、日本において、漢字伝来以前の「日本書紀」や「古事記」に記述されている「神代の時代」から伝えられた文字であるといわれています。現在報告されている神代文字は、「日文真字(アヒル文字)」、「日文草書(アヒル草文字)」をはじめ、前述の「ホツマ文字」や「カタカムナ文字」など数多くあります。江戸時代後期の国学者である平田篤胤などの提唱により論争がありましたが、古代日本語との音韻体系の矛盾が指摘され、納得できる考古学的資料も発見されていないことから、現在では後世の偽作として結論づけられています。

しかし、古来より伝承されてきたとされるこれらの文字は、縄文時代や弥生時代・古墳時代に文字としてではなく、記号として使われていた可能性も否定できないし、日本最古の歴史書である「古事記」や「日本書紀」においても、伝承による口述だけで、これだけのものが編纂できるのか、何か記述されたものがあつたのではないかと考えるのが自然です。

また、江戸時代以降には、神代文字は神社の印鑑やお札等に実用され、現代ではコミックやゲームなどで使われた例もあり、後世の偽作ではあつたとしても、神聖文字のひとつとしての役割を与えられています。

文字の力

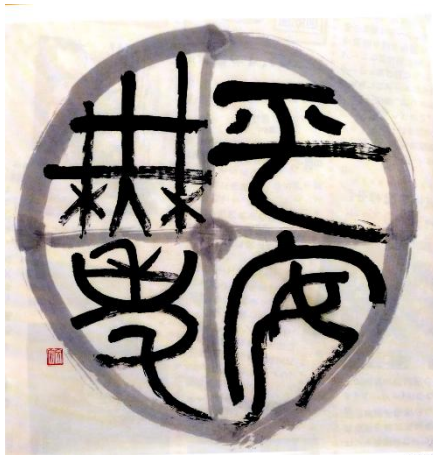
言葉と文字は一緒に進化していくと考えられます。話し言葉が新しい書き言葉を生み、書き言葉が新しい言葉を生み出していきます。文字を持つことで、より高度で複雑な表現が出来るようになるのです。

文字は、一部の王族などの支配者のみで使用できる神聖なものとして誕生し、その後、権力を示す象徴として、また、国家を統一する為の道具として力を発揮してきました。

中国漢の時代には、願いを叶えるため、瓦の円形の部分に吉祥語(めでたい語句)を篆書体や隸書体で書き入れました。これを「瓦当文」といいます。

神道は、縄文時代から始まったのではないとも言われていますが、神道の祝詞(のりと)は、言葉に神が宿るといわれる言霊の世界です。縄文時代は、自然と共生する争いのない平和な時代で、万物全てに神が宿るという思想がありました。これが、発せられた言葉の内容どおりの状態を実現させる言霊を生み出し、その後、文字が使用されるようになると、言葉と文字は同時に進化して行くことで、言霊の力も文字が受け継いで行ったと考えられます。文字が書かれた内容どおりの状態を実現させることになるのです。すなわち、文字霊(もじだま)の誕生です。現代でも「願い事」は神社や密教寺院などでご祈祷を受け、絵馬や、七夕の短冊などに「願い事」を書くことなど、言霊と文字霊を一緒に使うことで、願いを実現しようとしています。

- ② 「平安無事」これは、瓦当文風に平和への願いを書いた作品です。円形の中に篆書体の文字をいれ、字形の面白さを表現しました。



- ③ 「念彼観音力」これは、観音経の一節「念彼観音力(観音様の力を念ずれば)」を篆書体で書いたもので、観音様の力を念ずればすべてが上手くいくと言っています。

筆とペン

文字を書くとき、ほとんどの人はボールペンなどのペンや鉛筆などを使っています。これは、書きやすさや使いやすさを優先させたものですが、線の太さは一定であり、味わいとか面白さのようなものはほとんどありません。それに比べ、筆を使った文字は、線の太さは自由自在に変えられます。そして、筆を運ぶスピードを変えることで、色々な味わいのある線を書くことが出来ます。そこに書道という芸術性のある文化が生まれるのです。さらに、腕全体を使って書くことで、体のバランスが整い、整った体勢で書かれた文字には独自のエネルギーを内在することとなります。

筆を使って書くことは、訓練と技術が必要です。美しい調和の取れた文字を書くためには、常に練習が大切です。明治時代以前の人達は、常に筆を持って文字を書いていたので、残された作品



や資料などを見ると、手慣れた品格のある文字が多く見られます。

漢字伝来以来、文字を美しく書くことを追求し、さらに精神性をも追求し発展してきた日本の独自の書道文化は、書道人口の減少とともに、衰退の危機にあると言っても過言ではありません。

書道とは

「書」という文字は、古い篆書体の文字を見れば「筆＋者（音符）」で成り立っており、ひとところに定着させる意味があります。つまり、筆で字を書きつけて紙などに定着させることです。「道」は人としての生き方や物事の本質に迫る意味を持つ言葉で、合わせて「書道」は、書くという行為が、人としての精神的な生き方を表現する芸術の一つであるということになります。

中国の書道は、書法と呼ばれており、技術を重視することで発展・継承されてきましたが、日本の書道は、「道」を重視しています。すなわち個性や精神性を追求して、より芸術性を高めて行こうとする側面が強いのです。日本の場合は技術も大切ですが、より精神性を重視して行こうということになります。

書道の魅力とは、「文字が綺麗になる」「集中力が高まり、バランス感覚が養われる」「指先を使うことで、脳が適度に活性化され、記憶力維持や老化防止に役立つ」などと言われています。また、最近の研究では、「認知症の予防や改善策として、脳を活性化させる効果が高い」ことや「瞑想する時のようなリラックス効果が得られる」ことなどの効果が言われています。

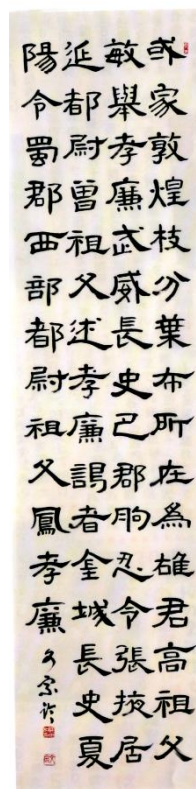
それでは、書道はどうやって練習するのかというと、必ず臨書という方法から入ります。まず、先生の手本を見て真似をします。線と線は繋がっているのか、離れているのか。線の太さはどうなっているか。止め、はね、払いなどはどんな形か、文字の形はどうなっているか、余白とのバランスはどうか、など多くのことを真似なければなりません。そして、慣れてくれば、古典といわれる法帖を自分なりに真似てみます。これが臨書といわれるものですが、同じ法帖で同じ文字を書いても、書き手によって全く違ったものが出来上がります。これが、臨書でも作品になる所以なのです。そして、多種多様の法帖を臨書するためには、それなりの技術が必要になってきます。その技術を習得するために、練習に時間を費やす訳ですが、この臨書という行為が、書道の効果を考える時に、非常に重要になってきます。

臨書をする時は、よく観察をして、それを自分の書くものに表現しなければなりません。集中しないと上手く書けないのは当然ことですが、この行為が集中力や観察力を高める効果に現れてきます。指先を使う技術も必要になってくるので、これが脳の活性化につながります。しかし、書道の魅力や効果はこれだけではありません。

- ④ 「曹全碑臨書作品」これは、漢の時代の曹全碑という隷書体の碑文の臨書作品で、整然とした美しさを表現しました。

「いまに在る」ということ

現代の私達は、過去にとらわれ、未来に不安を抱えて生きています。私達の



思考は、何かに集中をしていないと、すぐに過去の失敗した経験や将来に対する不安などを行ったり来たりします。たいていの場合、過去の失敗(失敗したと勘違いしていること)が足かせとなり、将来の行動に踏み切れないばかりか、起きるかどうかわからない結果だけを常に心配しているので、いつも不安を抱えて生きていることになります。結局、同じような結果が繰り返し起こり、思い通りならないと文句をいうだけの人生を生きてゆくことになるのです。

「いま」の思考や行動が将来を決定しているという自覚が必要なのに、この大切な「いま」を私達の意識は生きているのです。

書道の練習などで行われる「臨書」という行為は、過去から未来を行き来する心の状態を忘れさせ、「いま」という状態を作り出し易くします。また、「写経」においても同じ効果が得られるはずであり、このことから、書道は瞑想をする効果も得ることが出来るはずです。

量子力学と波動

現代物理学において、量子力学という理論が出てきています。量子力学とは、物質を構成する原子をさらに小さくしていくと電子・中性子・陽子などの素粒子の世界になるのですが、この素粒子の世界を研究するのが量子力学で、量子的世界では、従来の物理学(ニュートン力学)では説明がつかない不思議な現象が存在しています。

原子と原子の間は 99.999%以上が空洞であり、この空洞は非物質(エネルギーや情報)で満たされています。残されたごく少量の物質(量子)は、粒子の性質と波の性質を併せ持っており、観察すると粒子になり、観察をやめると波となってエネルギーに戻ります。こうして物質は絶えず変化しており、観察者である人の意識は、物質を変化させる力を持ち、思考によって物質を作り出していることになります。

量子力学では、物質は固体の粒子であり、非物質のエネルギーや情報は、波動と定義されます。しかし、物質のほとんどが、エネルギー(空洞)であるにもかかわらず、固体として認識できるのは、すべての原子が私達と同じ速度で振動していることによるものです。したがって、固体物質だけでできているように見えるこの世界は、意識(思考)とエネルギー(振動の速度・波動)でできていることになります。そして、似た者同士の波動は引き寄せあうため、より高度な意識とエネルギーの場へアクセスするためには、エネルギーの速度(波動)を高めることが大切であり、「愛」とか「感謝」といった私達の創造的な感情(思考)が必要になってくるのです。このことは、成功哲学などのジャンルで多くの書物にも記述されています。

波動を高める方法

波動を高めるには、「愛」とか「感謝」・「喜び」といったポジティブな創造的な感情を持って行動することと言われていますが、人間の思考は、ポジティブ思考をしているつもりでも、すぐに変わって行きます。過去の嫌な経験や失敗したことなどを思い出、「多分上手くいかないだろう」と行動にブレーキをかけてしまいます。イメージトレーニングをしようとしても、成功経験の少ない人は、成功しているイメージなんて湧いてこないし持続しません。すぐに、過去の失敗したイメージに戻ってしま

い、「こんなことは無理だ」と将来を諦めてしまいます。ここで大切なことは、このようなマイナスの思考が現れた時、なぜこんな感情が現れたのだろうかと内観することが必要になってくるのです。

内観とは、過去の出来事などを振り返り、その時の自分の感情を認識することで、どうしてこんな気持ちになったのか、なぜこんな感情が湧いてきたか反省することです。たいていの場合、上手くいかなかったときは、「妬み・嫉み」「不安・不満」「恐れ・怒り」など波動を低下させる感情が現れています。その根底には、「自分さえ良ければよい」という「保身や我欲」の感情が横たわっている場合が多くあります。

内観によって、「自己保身」「自我我欲」の感情が発見できたのなら、この感情を「自分だけでなくより多くの人々のために」という思いに変えていくことで、「愛」とか「感謝」・「喜び」といった波動を上げる感情が湧いてきます。そこでこのポジティブな思考や行動を補強するものが、言葉であり文字なのです。

成功への道

一つの大きな力は言葉です。スポーツ選手がコーチなどに「大丈夫、絶対上手くできる」などの言葉を繰り返し言われることで素晴らしい結果が残せた、などということは言葉の力(言霊)なのです。しかしながら、言葉も繰り返し発しないとすぐに忘れてしまいます。

その点文字はいつまでも残って忘れません。ただし、繰り返し読むことも必要になります。文字と言葉と一緒に活用することが一番良い方法だと言えます。目標を繰り返し書いて読んで、潜在意識に刻み込ませる方法が目標達成の近道なのです。このようなことは、多くの人が実践していることではないかと思われますが、どういう気持ちでどうやって書くのかということも大切であり、このことが抜け落ちていると目標達成は困難な道になってしまいます。

人は、「愛」とか「感謝」・「喜び」といった感情の時は「ワクワク」します。「ワクワク」する楽しさが起きかどうかは、物事が達成したり成就したりするための重要なポイントであり、この「ワクワク」感を持続させるために、言葉や文字が必要に成ってくるのです。文字を書く時も楽しさが必要になります。

- ⑤ 「喜・笑」この作品は、春日井市「下原公民館」に寄贈したもので、全てにおいて喜び、そして笑うことは大切なことです。篆書体でシンプルに書いてみました。

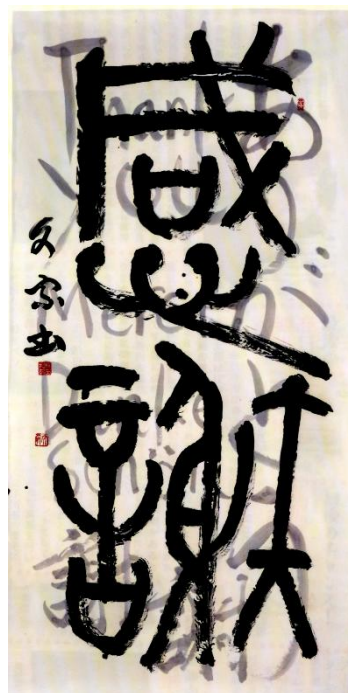


「感謝」とは
ここで「感謝」という感情について考えてみたいと思います。「感」とは、「心+(カ
ン・音符)」で、戈(ほこ)を使ってショックを与えて口を閉じさせる心の意があり、心を強く動かすという意味になります。

「謝」は、「言+射(シャ・音符)」で、張りつめた矢を手から離しているさまに言葉が加わる意で、言葉に表すことによって、緊張を解いて気楽になるという意味になり、合わせれば、心を強く動かして「ありがとう」の言葉を発し気楽になるという意味になります。感謝とは、心から「ありがたい」と思い、その思いを言葉に表すことが必要だということになるのです。

体調が悪くなると、書の生き生きとした線は書けなくなります。自分のエネルギー(波動)が弱くなっているからで、文字は体の変化も教えてくれます。このことは、毎日が「当たり前」に過ぎていく「一日の三回の食事が出来たこと」や「犬を連れてゆっくりと散歩出来たこと」などは、「当たり前」だけど健康で何も問題がなければ出来ない「有難い」ことで、「当たり前」の日常に「有難い」ことは無数にあるのです。

「感謝」という感情が波動を上げることに必要であるのなら、毎日の日常の中に、波動を上げるチャンスはいくらでもあることになります。



- ⑥ 「感謝」この作品は、淡墨で「ありがとう」の言葉を、日本語、英語、仏語、独語、中国語で入れ、その上に濃墨の篆書体で「感謝」の文字を書き世界中に感謝があふれることを表現しました。

「愛」とは

次に、「愛」という感情について考えてみたいと思います。「愛」という字は、「心+久(足を引きずる)+厶(カイ・人が胸を詰まらせて後ろにのけぞったさま・音符)」から成り立っており、足もそぞろに進まないさまを表しています。人の複雑な感情を文字に表そうとすると大変難しい作業になるのです。

「愛」には、色々な種類があり、「恋愛」「夫婦愛」「友人愛」「家族愛」「自己愛」など様々な感情が考えられますが、一般的には、「大切に思う気持ち」や「いとおしく思う気持ち」であり、これは、損得を度外視した、無償のものであるべきです。したがって、このような純粋な感情が波動を上げることになります。しかし、ここに「我欲」や「自己保身」の心が入ってしまうと、逆に波動は下がってしまいます。自分の感情には、常に注意することが必要なのです。

書道のあり方

書道はまず筆という道具を使います。筆を使うことで、太い線や細い線が書き分けられ、文字に立体感がでできます。さらに、書くスピードに変化を付けたり、リズムカルな上下運動(筆の開閉)を使うことにより、変化に富んだ線が生まれ、それが芸術的価値を生み出していきます。とにかく、筆を使った文字は、より個性的でインパクトの強いものになるのです。

書くという行為には、認知症予防や改善効果があり、瞑想する効果も認められると言われています。さらに、書道では、集中力や観察力が身に付き、体のバランスを整えて、文字も綺麗に書けるようになります。

書道は、一見将来の生活に役に立たないようにみえるものの、精神的成長と教養を高める上で大いに役に立ちます。さらに、高齢者になってからでも、集中しながら腕を動かすことによって瞑想効果が期待できるとともに、記憶力向上や認知症の予防と改善効果も期待できます。

また、もう一つの大きな効果が、目標達成の手段として使われていることです。漢字は、占いの結果を記録するために、神聖な文字として誕生しました。漢の時代には、吉祥語(めでたい言葉)を屋根の瓦に入れる「瓦当文」が流行するなど、目標や目的を書き入れて達成を願う風潮は、古来より続いており、この目標や目的を紙に書いて目につくところへ張っておき、自分の潜在意識に刻み込ませるといったことは、多くのひとが実践していることであろうと思われます。

これは、毛筆で書いた方がよりインパクトがあって効果が感じられます。しかしながら、どういう気持ちで書くかによって、結果は大きく違ってきます。

思いを実現させるには

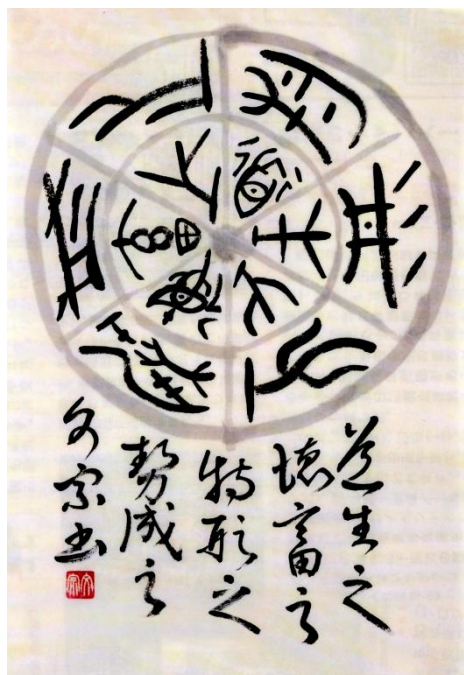
まず、波動を上げることが必要で、それには、「愛」とか「感謝」・「喜び」といったワクワクした感情を持つことで波動は上がります。この感情をもって、夢や目標をイメージすることが大切です。すでに達成して、自分が大喜びしているイメージが浮かんでくれば、達成できるという確信になります。その手助けとなるものが書道であり、書いたものを常に目につくところに置き、それを声に出して読んで潜在意識に刻み込ませることでイメージがより容易になります。

書く時は、ただ書くという行為に集中し楽しむことが大切です。「上手く書こう」などという欲望が湧いてくると、思考は過去や未来へ行ったり来たりします。今の行為が未来を創り出しているので、

「いまに在る」ことが出来ないと目標とする未来は創り出せません。私の経験からも、欲望を捨て、「これは面白い変化のある線が書けた！」などと楽しみながら集中して書いていると、結構いい作品が生まれるものです。

「写経」においても同じであり、ただ単純に文字を写すということが必要です。多くの場合、「写経」とは「般若心経」を写すことで使われますが、「般若心経」の意味をある程度知っているかどうか大切なことです。「般若心経」に書かれていることは、量子力学の理論にある意味共通しています。般若心経の「空」の世界は、正に「量子」の世界を表していると思われます。

⑦「老子道德経より」この作品は、老子道德経第 51 章の一節「道之を生じ、徳之を蓄え、物之を形づくり、勢之を成す」を書いたもので、宇宙・万物の生成過程を述べており、円形の瓦



当の中に篆書体で、そして下部に草書体で同じ文章を書き、神秘性を表現しました。

般若心経と量子力学

ここで「般若心経」について考えてみたいと思います。「般若」とは仏の智慧、すなわち世の中の在り方や現象を深く理解する智慧とされます。「波羅蜜多」は「完成」「到達」の意味で使われ、「般若波羅蜜多」で「智慧の完成」という意味になります。

観自在菩薩(観音様)が、「智慧の完成」の為の修行を行って、すべては「空」、すなわち、この世のあらゆるものは実体が無いことを悟ったということを、舎利子(釈迦十大弟子の一人)に説いている内容で、実体がないので、物事に執着したり、あらゆる現象に苦しむ必要がないと説いています。

これは正に、量子力学でいう素粒子の世界に似ています。原子と原子の間は 99.999%以上が空洞であり、この空洞は非物質(エネルギーや情報)で満たされています。残されたごく少量の物質(量子すなわち素粒子)は、粒子の性質と波の性質を併せ持っており、観察すると粒子になり、観察をやめると波となってエネルギーに戻ります。こうして物質は絶えず変化しており、これはまさに実体のない世界のことなのです。観察者である人の意識は、物質を変化させる力を持っており、思考によって物質を作り出しているということになります。ここで「般若心経」の最後の核心部分「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」に続いていきます。

この「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」とは、いろいろな訳がありますが、多くが「往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に完全に往ける者よ、悟り、幸あれ」とされています。「彼岸」とは悟りの世界のことですが、肉体を持って行ける所ではありません。行けるのは、私達の意識すなわち光子(フォトン)なのです。素粒子のなかで、光子(フォトン)には寿命がないといわれています。したがって、わたしたちの意識は、生死に関係なく彼岸に行くことができるはずです。つまり、この般若心経の核心部分である真言は、私訳ですが、「私達の意識よ、光の波動となって多くの光の波動を引き寄せ、この大きな光の波動を観察して粒子に形を変えることで、すべての物事が成就することを悟りなさい。この悟りが幸せを導きます。」と言っているように思えてくるのです。



最後に

それでは実際に、どういう文字をどういう書体で書いたらいいのでしょうか。⑧の

文字は、金文調の篆書体で「繁栄」と書きました。大切な事は、読んで言葉の意味が理解出来ることです。私の場合は、多くの漢字が、物の形から生まれているため、本来の意味をより純粋に伝えることが出来る甲骨文や金文などの古典文字を使って書き、読める様に楷書または行書で小さく文字を入れています。そして、この文字の形

自体にエネルギーが内在していると思い書いています。

どんな書体でもいいですが、言葉の意味をよく理解して、その言葉の意味する情景をイメージ出来るようにすることです。「繁」は、母が子供を産むように草がどんどん増えふさふさとしたひも飾りになって行く様で、どんどん増えることを意味しています。「榮」は、木に火が灯ったように、木全体をとりまいて咲いた花を表しており、派手な様子を意味します。この2字を熟語にすれば、花が木いっぱいに咲

いてどんどん増えていく様子の中で、さかえるさまを意味することになります。この「さかえるさま」を自分自身が何かを行って「さかえるさま」をイメージ出来るようになれば、イメージ通りの出来事が引き寄せられて来るようになるのです。

次に紹介する⑨の文字は、同様に金文調の篆書体で「萬物生光輝」と書きました。これは禅語で、宇宙やこの世のあらゆるすべてのものは、自ら光り輝いて存在しているという意味です。「生」は、地上に若芽のはえた様を示しており、いきいきとして新しい意味になります。生きとし生けるもの全てが、存在するだけで光り輝いており、その全てのものを大切にしながら、いきいきとして自分の使命を果たしていくことが人生なのでしょう。光り輝くものは自分の意識・心であり、量子力学の世界では、光子(フォトン)と呼ばれるものです。輝いている意識・心で生きているかどうか、常に感じていくことが必要だと思います。自分の意識・心が常に輝いているかどうかは、自分の心がワクワクするかどうかであり、ワクワクすると波動は上がっていき、同じような波動のものを引き寄せて来ます。そこで自分の目標をしっかりと観察していくことで、波動は粒子

になり物事

が生成されていきます。これが目標達成の仕組みだと思われま

す。
最後の⑩の作品は「花開蝶自来」で、これも禅語ですが、花が美しく開けば、自然と蝶が止まりに来るように、ありのままの姿で輝いていれば、素晴らしいこと



は、自然と引き寄せられてくるとの意味になります。この作品の特徴は、草書体で書かれたものの中に「蝶」のみ篆書体で書き、「蝶」を強調しています。「蝶」は、私達が引き寄せるもの、すなわち夢や目標であり、それは、私達がどのように意識するかによって決まってきます。多くの方々が自分の夢や目標達成に「書」というものを活用して頂き、「思い」が実現されることを願います。

作品データ

- ① 甲骨文(BM69) 金文(BM67)
- ② 平安無事(BM63)
- ③ 念彼観音力(BM66)
- ④ 曹全碑(BM65)
- ⑤ 喜笑(BM65)
- ⑥ 感謝(BM67)
- ⑦ 老子道德経(BM64)
- ⑧ 繁荣(BM56)
- ⑨ 萬物生光輝(BM66)
- ⑩ 花開蝶自来(BM69)
- ⑪ 有志事竟成(BM69)



(記録・編集:河地 清)

OPINION 「鉄は熱いうちに打て」書写教育は幼少期に！

「書道を通してあるいは文字を書く行為を通して精神的に豊かになり夢を実現させる為の手だすけになればと思う。」(梶田氏著書『願いを実現させる書』)との考え方に共感いたします。書とは何か、書を書くことの意義に対する根源的な「解」のひとつであると思います。現代社会は、「漢字が思い「出せない」「字が下手になった」。いま、パソコンやスマホの普及で、書く力の衰えを心配する人が増えている。そして実際、“手書き離れ”が学力や認知機能の低下につながりかねないという研究結果も次々に報告されている。海外では、デジタル教育から手書き重視へ回帰する動きが盛んに……。また認知症予防や思考の整理に生かそうとする取り組みも注目されている。デジタル時代にこそ問われる、“手書き”の価値とは？が問われています。「書写」教育の重要性が再認識されています。「書のまち春日井」を標榜する春日井市の書写教育はますます注目されてゆくことでしょう。(『クローズアップ現代』— 最近、手書きしていますか？最新研究が明かす“頭を動かす力”— 2026.1.7(水)午後7時30分放送 出演者:糸井重里(コピーライター)大塚貞男(兵庫教育大学准教授 キャスター:桑子真帆(NHK アナウンサー)参照。 (文責:河地 清)

かすがい市民活動情報サイト: <http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学

検索

